
この港

麗韻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

コノ港

【コード】

N9882G

【作者名】

麗韻

【あらすじ】

思いつめた少年は、無意識に唯一の光の下へ。

書類では繋がっているが、ほぼ絶縁となったわけである。
両親に怒りを覚えながら、帰ることにした。

|||||

「よう青年。帰ったんじゃないかったのか。」

工場の前に、まだおっさんがいた。

「帰ってくるなど、追いつ返されました。」

若干誇張だが、簡潔にするためにそう答えた。

「でも来たところには帰りたくない。そうだろ？」

「・・・何でそう思うんですか。」

このおっさんは理由を知ってるのか？

「こんな中途半端な時期の帰省だからな。向こうで嫌なことがあつて家出したん

じゃないかと思つてな。」

すごい洞察力だな。

そう思つて改めておっさんを見る。

笑顔のおっさんは、強面にも関わらず。

やさしい印象を与えた。

「何があつたんだ？話してみよよ。」

こんなことを赤の他人に言われても、普通は話さないだろうなと思つたが、笑顔

のおっさんはなぜか信用できる気がした。

「ついでに泊まるか？」

だからこそ、迷惑かけたくないとも思つた。

でも、話ぐらひは聞いてもらおう。

そうしないと。自分がパンクしてしまいそうだったから。

「それは遠慮します。」

「まあ普通はそうだよな。『それは』ってことは、話しはしてくれ

るってことだ

よな？」

「はい。良ければさせてください。」

「よし分かった。」

そういつて、おっさんはどこからともなくもう一つ腰掛けを持ってきて、座るよ

う促した。

すわって、落ち着いたところで、男は語りだした。

「僕は三人で暮らしていたんです。兄と姉と僕。結構仲良く暮らせていました。」

「喧嘩したのか？」

「そうです。理由を聞きますか？」

「なんだ？」

「兄と姉がね、結婚するって言ったんですよ。」

兄と姉は血が繋がってない。

二人とも連れ子だったんです。

その後に僕が生まれて、僕は二人共と繋がっているんです。」

「複雑だな。」

「そうですね。つづけますよ？」

「……いいぞ。」

「僕は反対したんです。あんた達兄妹だろって。」

素直に応援できなかつたから。

そしたら喧嘩になったんです。

それで家を飛び出して帰ろうとしたんです。」

「そして追い返された。」

「ええ。元々不仲でしたからね。それが三人で暮らしてた理由でもあつたんです。」

「。」

「不仲だつたらなぜ家に帰つた？」

「甘い考えでした。仲は悪くても親ですからね。なんとかなると思つたんです。」

まさか追い返されるとは思つてなかつたので。」

「なぜそこまでして・・・」

「孤独つて奴がね。怖かつたんです。誰でもいい、縋りたかつたんです。そんな

心から、素直に賛成できませんでした。」

「・・・。」

「僕は二人の幸せよりも自分の幸せを選んだんです。最低だかつて思つてます。」

でも怖いんです。独りになるのが。」

最後は顔面蒼白の状態で、男は語り終えた。

重苦しい沈黙のなか、おっさんは口を開いた。

「他に知り合いはいないのか？」

「・・・学校の友人とかならいますよ。」

「そいつらだけじゃあダメなのか？」

「はい。我が儘なのは分かつているんですが。二人がいなくなると代えがいない

つていうか、なんか他の人と違うんです。」

「結婚するといなくなるのか？」

「はい・・・？」

「さつき二人がいなくなるとつて言ったからな。」

「そう言うわけじゃあないです。頼る相手がつてことです。」

「頼つても良いんじゃないか？」

「えっ？」

「そりゃあ結婚してすぐはさすがにやめたほうが良いと思うが、少し間を置けば

俺は問題ないと思うぞ」

「・・・そうですか？」

「ああ。だって結婚は二人の話だ。おまえが近づくなってわけじゃないだろ、おまえの関係は、ちっとも変わってないんだよ。」

いつまでたっても変わらない絆つてのは少ないけど必ずあるもんだよ。」

「・・・そう・・・ですね。おじさんありがとうございます。」

「帰るのか？」

「はい。もう悩みも無くなりましたから。」

そういつて清々しい気分の男は、かおを綻ばせながら、港へ向かった。

港について、さらに顔を綻ばせた。

そして船を待っている間、潮風に当たりながら帰ってからのことを思案していた。

まず謝ろう。ごめんなさいって。そして祝福して、応援してあげよう。

船が来た・・・反対側の波止場に。

「やっべー!!」

思わず叫んで、荷物を持って疾走した。

その顔は必至ながらも楽しげで、走り方も軽やかだった。

朝日は、男の行く手を照らしてくれていた。

(後書き)

感想・アドバイス等ありましたらお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9882g/>

コの港

2010年10月10日04時08分発行